



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会科学認識と社会的経験の位置
Author(s)	中俣, 保志; Hoshi NAKAMATA
Citation	社会教育研究, 18, 87-102
Issue Date	1999-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28527
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_P87-102.pdf



社会科学認識と社会的経験の位置

中 俣 保 志

はじめに

学校教育において、学習者の自然科学嫌い所謂「理科ばなれ」が指摘されて、久しい。また一方で、社会科学分野も、「暗記科目」としては、あまり人気のある科目とは言えない点も、指摘できるであろう。特に社会科学の場合は、研究対象が人間の活動分野と密着しているという性格から、その内容が複雑なものにならざるをえない。そのために、学習者ならずとも研究者においても、「社会にどのようにアプローチするか」ということは、回答困難な問にならざるをえない。そうであるとすれば社会科学の領域を理解するきっかけとなるであろう、社会科教育においても、教材としての「社会にどのようにアプローチするか」という問は、指導者はもとより学習者においても、大きな課題となるだろう。

本論文は、社会科教育の課題を検討する前に、社会科学が対象としての「社会にどのようにアプローチするか」という問に「社会的経験への配慮」をもって応えようとする弁証法的社会理論家・哲学者アドルノの社会科学議論をふまえた上で、「社会へのアプローチ」を検討することを目的とする。また本論文は、学校教育以外の場所で経験される「社会的経験」に、社会認識の内容を深める可能性があることを検討することを、意図している。

さしあたり、本論の素材となるのは1961年にドイツのチュービンゲンで行われた社会学会のアドルノーポパー間のいわゆる「実証主義論争」である。本論は、この報告を基本とした著書『Positivismstreit in der deutschen Soziologie (同書を以下『実証主義論争』と略す)⁽¹⁾を、基本文献とした。この著作には、アドルノ、ポパーの他に、アルバート、ハーバーマスによって学会終了後行われた誌上論争も収録されているのだが、本論文では、アドルノーポパー両者の学会報告と、学会報告の再検討としてアドルノによって記された『論争「序論 (Einleitung)」』とに、主に焦点を当てることとする。また、厳密に言えば、この著作で主題とされているのは「社会学」であるのだが、本論文著者は「社会科学における社会へのアプローチ」に関して両者が指摘する部分に眼目をおくことにする。

はじめに、アドルノが指摘する「実証主義」及びポパーの批判点が素描される。続いて、アドルノの弁証法的批判理論の特徴が素描される。最後に、アドルノの社会理論の立場を踏まえた上で、社会認識にかかわる若干の考察が行われる。また結言部分では、社会認識に「社会的経験への配慮」が関わる点をふまえ、社会認識の課題と「社会認識の場の可能性」を考察する。

アドルノが社会を対象にする際の、基本的な視点を確認しておきたい。すでに彼は『啓蒙の弁証法』において、「物象化 (Verdinglichung)」⁽²⁾の批判が、自らの哲学的課題であることを主張している⁽³⁾。さらに、学問的な立場で「物象化の容認」を行うイデオロギーとしての論理中心主義が、批判されてもいる⁽⁴⁾。『啓蒙の弁証法』では「論理中心主義」の姿勢が、社会の内で形成される「物象化された意識」の構造を、批判し得ないこと一つ「啓蒙」としての科学や学問が抱える「自然支配」の構造が、自らの立場を根本的に批判し得ないこと一が指摘されている。このような学問レベルでの「論理中心主義」への批判を、現代社会が抱える現象としての物象化の批判を基本にして構成するところに、アドルノの社会批判の特徴を見ることができよう。『啓蒙の弁証法』で行われたような、社会批判としての「論理中心主義」批判は、『実証主義論争』における「実証主義」批判においても、引き継がれているモチーフであると考えてよいだろう。そこで『実証主義論争』においてアドルノが行っている「実証主義」あるいは「科学主義」に対する批判を手がかりに、彼の社会理論を特徴づけることから始めてみよう。

I アドルノの批判する「実証主義」

『実証主義論争』の「序論」において、アドルノは、61年の学会における彼とポパーの報告を振り返って、彼の立場から論争再検討を行っている。ここでは、実証主義の「分析科学的理論」の内在的批判に限界があるとされている。「実証主義」は、その理論の「公理に立ちいって考えること (PS-s.8.『論争』八頁)」がなければ、「論理的な時限爆弾を抱えることになる (ibid.)」という点が指摘されている。そしてアドルノの「実証主義」批判が、「実証主義」の内在的批判の限界すなわち「実証主義」理論の「物神化された原理 (fetischisierten Prinzip) (ibid.)」を明確にすることを、目的の一つとしていることが述べられている。つまりこの「序論」全体の構成として、彼の言う「実証主義」の理論的限界の明確化が、課題として意識されているといえるだろう。この節では、アドルノがその限界を批判する形で明確化する「実証主義」の特徴を拾い上げてみたい。

1.1 認識主観の実体化

「実証主義」という用語は、コントの著作に遡ることができる。また論理実証主義を連想することもできるだろう。しかしアドルノが用いる「実証主義」という用語は、コントからヴィットゲンシュタインなどさまざまな哲学的な姿勢に、広く用いられている。また同じような意味合いで「科学主義」という用語も用いられる。

アドルノによると、「形式論理にしたがって」議論を進めることに重点をおくことが、「実証主義」的見解の核心を含むとされている (PS-s.9.『論争』九頁)。アドルノは更にこのような「形式論理」の重視が、「実証主義」の主観的な性格を形成していることを、指摘している。というのも、論理的

で主観から純化された客観性を求める「実証主義」は、科学的制御に妥当するものによって、哲学の課題を清算しようとするところから、「認識主観の実体化 (hypostasieren) (PS-s.12.『論争』十二頁)」を行うからである。

このような「実証主義」の主観主義的姿勢は、『論理哲学論考』期のヴィットゲンシュタインが自己の哲学の科学性を維持するために「感覚主義的解釈の解消」を行ったように、感覚的経験世界と論理の分離を促した。他方、「実証主義」の哲学の成果は、「主観的意識にふさわしい」ものである「明確さ」に定式化された (ibid.)。このように「実証主義」においては、認識主観と対象とが明確に分離され (PS-s.13.『論争』十四頁)、求められる客観性は論理的な場面即ち「命題の明確さ」⁽⁵⁾におかれる。アドルノによれば、このような主観と客観の分離は、社会という客観についての認識を妨げる以上、更なる反省によって、批判されなければならない (PS-s.20.『論争』二十～二十一頁)。

1.2 ポパーの内にある「実証主義」

以上のような「実証主義」の認識主観中心主義的性格は、自ら「実証主義」を批判するポパーの内にも見出される。アドルノは、以下の点において、それを指摘している。この批判の射程には、ポパーはもちろん、ヴィットゲンシュタインや、論理実証主義者も含まれる⁽⁶⁾。

1 認識主観の尊重 (矛盾の場合)

アドルノは、ポパーが理論の科学性を高めるために批判を強調することには、同意している (PS-s.31.『論争』三十一頁)。しかしポパーの批判の適用範囲が認識主観の妥当性にのみ限定されることを、アドルノは批判する。というのもアドルノによれば、社会科学における批判は、「社会の制度の真理を語ることは、社会的制度を取り扱っている定理の真理について語ることに劣らず、重要な意味 (PS-s.33.『論争』三十三頁)」即ち「野蛮へと逆行するのを妨げるためにも社会は変革されなければならない」という強調された意味での経験的実践的批判 (PS-s.34.『論争』三十四頁) を内包するものでなければならない。アドルノにおいては、論理的批判と、実践的な批判とは、あくまでも弁証法の「概念の同一の運動の契機 (ibid.)」なのである。

このようなポパーとアドルノの批判に対する立場の違いは、「矛盾」に対する立場の違いとして、アドルノによって整理されている。ポパーにおいて「矛盾」とは、「対象と現実」との間の矛盾であり、「科学的思考の単なる不均斉 (PS-s.32.『論争』三十三頁)」である。これに対し、アドルノは、社会自体が矛盾を内包する存在であることを指摘している。たとえば交換価値。「交換においては、すべては正当に行われが、にもかかわらず正当に行われぬ、という矛盾が簡潔に述べられている (PS-s.34.『論争』三十四頁)」。こうした客観の対象としての社会の内に、矛盾を見て取ることがないならば、実証主義は真に「矛盾や無矛盾性からも同じように自由になる (PS-s.36.『論争』三十六頁)」ことはない。なぜなら単に主観的な場面で追及される無矛盾性や抽象化による論理と対象の同

一化過程という思考形態も、社会における交換にその原型を持つからである。そのために、ポパーもやはり、主観主義的な立場と、アドルノに指摘される。

2 客観に対する姿勢

ポパーの認識中心主義が、アドルノにおいて、批判された点を見つけた。ではこのような姿勢は、どのような点で、批判されているのだろうか。

a) 社会的構造へのアプローチ

主観主義的な「実証主義」は、「意見や態度から、個別的主体と社会の自己了解から出発し、社会から出発しはしない (PS-s.14.『論争』十五頁：傍点 中俣)」。このような「実証主義」にとって、社会の構造の客観性は、「神話的遺物 (ibid.)」とみなされる。このような「実証主義」はシェリックのようにプロトコル命題に表わしうることのみをもって「現象を妥当なものとしようとする (『論争』十九頁)」。しかし社会現象としての「諸事実の内には、諸事実自体ではない何ものかが現れる (ibid.)」のであり、そのような現象の本質に、本来理論は迫らなければならないとされる。というのも、アドルノにおいては、認識の対象が主観に媒介されるがごとく、「主観の方もまた、主観によって認識されるべき客観性、社会的過程のなかに契機として属している (PS-s.23-24.『論争』二十四頁)」とされる。実証主義がプロトコル命題によって、固定化する「諸事実」の事実性の概念は、「科学主義的社会学が洞察できない基体である点を強調してそれについて沈黙を守ることを誓っているその同じ社会の機能 (PS-s.20.『論争』二十頁)」として、アドルノは考えている。またこのような社会的過程の中で、「認識はますます高度に科学化され、生産力となっている (ibid.)」。このような対象としての社会と、認識主観との相互媒介性を見て取ることのない認識主観主義が、社会的生産力としての自己の立場を、批判することはむづかしい。この事は、科学が自身に「批判的に関わる洞察や処置の仕方 (PS-s.25.『論争』二十六頁)」を払いのけさせる原因となる。

b) 総体性 (Totalität)

更にまたアドルノは、社会が個別的主体自身の内において彼らを拘束している「総体性 (Totalität) (PS-s.20.『論争』二十頁)」という構造をとっている、と指摘する。「総体性における位置価値を持っていないような社会的諸事実は存在しない (ibid.)」し、「総体性はあらゆる個別的主体を前もって秩序付けている (ibid.)」のである。このような総体性は、「どの個別者も、その命をつなぐためには、一つの機能を引き受け、その機能を持つことに感謝するよう教わる (PS-s.17.『論争』十七～八頁)」全体としての社会である。この総体性は、「薄っぺらな思考の産物ではなく、社会の悪しき基本状態、交換の悪しき基本状態 (PS-s.20-21.『論争』二十一頁)」とされる。総体性の実現において、「客観的な抽象化がなされ、生産者と消費者との質的性格が度外視され、生産の様式が度外視され、

更には生産と消費の社会的メカニズムが副次的なものとして満足させるような欲求が度外視される (ibid.)」。総体性の中で形成される客観的な「交換の抽象性 (PS-s.21.『論争』二十二頁)」は「特殊なものに対する一般的なものの支配に、強制的構成員に対する社会の支配に、結合している (ibid.)」。社会的支配関係に結合している総体性は、客観的構造として、批判の対象として、捉えねばならない。そしてアドルノの主張する弁証法において、総体性は、社会的事物の内に現れる「個別の人間の生活と矛盾している (PS-s.19.『論争』十九頁)」存在として、批判の対象として捉えられている (ibid.)。

「実証主義」は、「総体性の概念を神話的な前科学的な残存物として中傷 (ibid.)」する。確かにこのような「社会の総体性」の概念は、学問的に「明確」であるわけではない。それは社会が、一方で「諸主体の合成されており、諸主体の機能連関によって構成されて (PS-s.22.『論争』二十三頁)」おり、「社会において客観的に規準を与える交換という事態そのもの (ibid.)」が、「主観的行為を意味する (ibid.)」かぎり理解可能でありながらも、他方でまた「他律的な自然 (『論争』二十頁)」でもあり主体の実現を阻む「自立してしまった社会 (『論争』二十三頁)」として「ただ自立化するという法則 (ibid.)」以外は認識不可能な性格を持からである。認識主観に重点をおく立場の社会科学では、「総体としての社会」である総体性は学問的に明確に検証することが難しいのである。つまり不明確なものを追放する「実証主義」は、「二重の関係 *doppelschlächtigen Verhältnis*」の性格を持つ社会という「対象へ及ぶ洞察を禁止 (PS-s.21-22.『論争』二十二頁)」してしまうのである。

ところで個別的主体にとって、社会的支配関係にかかわる社会の総体性は、経験の内に実在性を持って存在し、主体を否定する。このような経験は社会の側から見れば、社会が諸主体に、社会の「主体性」を見通すことを許さず、「社会の仕組みが総体的主体の回復を妨げる (PS-s.43.『論争』四十二頁)」過程として、把握される。逆に主体の自己認識として社会が認識される場合は、社会が、諸主体に「社会を形成している人間 (ibid.)」を参照させ「またその組織原理が主観的原理やそのもつとも抽象的な形式—本質的に間主観的なものとしての論理 (ibid.)」を参照させる過程として、指摘される。アドルノの立場からすれば、「実証主義」の追求する命題の明確さも、ポパーの問題の立て方も、認識主観が設定した「理解可能 *Verstehbar* (PS-s.22.『論争』二十三頁)」な社会という側面において、認識を行うにすぎない。このような立場からは社会の二重の関係という性格は理解されない。アドルノにおいては、認識され批判されるべきは、「総体的主体の回復を妨げる」社会の仕組み即ち客観的構造を含む、社会総体であるとされる。

アドルノが批判する「科学主義」や「実証主義」の主観的認識に重点をおく立場では、社会の「認識不可能」な領域を含む「社会の二重の関係」は、把握されてはいなかった。個別的主体の経験の内にある総体性の像は、どのように論理的に認識されるべきなのであろうか。先ほどから述べてきたとおり、認識主観的アプローチでは、社会の理解不可能な相を見て取ることが断念されるので、総体性は「検証不可能」のレッテルを貼られ、総体性にアプローチすること自体が禁止される。そ

のため認識主体の越権をおこさず客観に消極的に迫ろうとするなら、総体としての社会は、「解明不能という契機が客観的にそれに適して（『論争』二十頁）」いる「物自体」として、定式化するしかない。もしくは、「事実的なものや、個別的なものにおいて（PS-s.42.『論争』四十一頁）」つまり、個別的諸主体としての人間が持つ「目に見えず支配している総体性の経験（PS-s.22.『論争』二十二頁）」の相において、総体性を捉えることが、アドルノによって指摘されている（PS-s.42.『論争』四十一頁）。もし認識主観主義的な「実証主義」のように、社会認識が「乖離したもの、つまり主観的に解釈された資料と、その補足としての主観の純粋な思考形式（PS-s.22.『論争』二十二頁）」だけに関わるならば、社会的経験を捨象し社会を「外面的」に対象化された「疎外された存在」としてのみ、認識することになるだろう。それでは社会の主體的な面を見ようとするあまり、社会を主体から離れた死んだものとしてみるようになってしまう。

「問題を一義的に決定して『反証可能』とするという方法論的意志が無反省に優越するとき、科学は『変数』の除去によってのみ出てくるような一たがって対象を捨象し、それによって対象を変えてしまうことになる—二者択一へと収斂してしまう（『論争』PS-s.42.四十一頁）。」

さて今までは、「実証主義」の認識主観主義が社会の客観構造に「論理的不明確さ」を理由に迫っていきたくない点を、アドルノが批判しているのを見てきた。この過程は、認識する「主観が客観から距離をとる（『論争』二十九頁）」といえる。更にこの過程が、主観による客観の支配を含むということが、アドルノによって指摘されている（PS-s.29-30.『論争』二十九～三十頁）。このような精神の過程なしには、「人類が類として自己主張すること（PS-s.29.『論争』三十頁）」も「科学的客観化の過程（ibid.）」も不可能であったとされる。他方アドルノは、この過程を、主観が「無意識に—自分の方で自己を客観となす（ibid.）」過程即ち「意識の物象化（Verdinglichung）の歴史的始源（ibid.）」として、指摘する。客観と媒介されているはずの主観が、客観を支配することを目的に客観を対象化してしまえば、主観に注目される客観象は、客観の实在より萎縮したものにならざるを得ない。この点が、認識主観主義的な「実証主義」が、客観構造としての社会を、認識しようとしたくない原因として、指摘されている。

アドルノの批判点をまとめてみると、「実証主義」は、第一に「認識不可能」な部分を含む客観としての社会総体を自らの思考形式から追放し、第二に同時に対象となる客観像を萎縮したものとし、第三に第一、二の過程が「主観の客観の支配」という目的を持つ等の点があげられるであろう。そして最後にこのような認識主観に重点をおく思想は、客観に迫ることを自ら禁止し客観構造から遠ざかるだけでなく、主観を萎縮させる「物象化の始源」を内包する過程である点が、批判される。このように「社会の総体性をどのように理解するか」という点から、「実証主義」の客観性及び客観に対してとる態度が、批判されるべきものとして、アドルノによって指摘されている。このような「実証主義」の認識主観重視の姿勢は、「主観的還元⁷の subjektiven Reduktion」として表現できるであろう。

c) ポパーの客観性カテゴリーと「実証主義」の単純性

以上のような点をふまえて、ポパーの「客観性」が、アドルノによってどのように批判されるかを確認してみよう。社会の認識を「理解可能」領域においてのみ追求しようとする方法が設定する客観性は、「客観性」の構成要素としての客観的社会構造への批判を、無視することとなる。ポパーは、科学的客観性を、「競争（個々の科学者の間の、また異なる学派の間の）、伝統（すなわち批判的伝統）、社会制度（例えば種々の競合する雑誌や出版物による研究成果の公表、会議における討議）、国家権力（すなわち自由な討議に対する政治的寛容）」（PS-s.113.『論争』百十九頁）」という社会的カテゴリーで説明している。このようなカテゴリーには、「すべての競争メカニズム（PS-s.37.『論争』三十七頁）」や「市場での成功（ibid.）」という要素が、入り込んでいる。このようなポパーの客観性の構成は、アドルノによって、「絶望の楽観主義の現れ（ibid.）」として批判される。社会の客観的構造の批判にかかわろうとせず、ポパーのように特定の社会構造の「秩序図式」を「客観性」の構成要素にして固定化させることは、論理的思考をイデオロギーと化すに等しい行為であるとされる（ibid.）。このような「社会的客観性の否認（ibid.）」は、通常「実証主義」においては、科学的中立性をもって、主張されるのである（PS-s.36.『論争』三十六頁）。前節で確認したとおり、「実証主義」の主張する「科学的中立性」も、特定の社会構造の固定化につながる原理として、批判されなければならない。

さらにポパーが学会報告⁽⁸⁾で定式化した社会科学の方法のうち、対象の「単純化」と「追行可能性」による検証作業とが、自然科学的方法から借りてきた主観的客観性を構成にすぎない方法である点を、アドルノは批判する。

アドルノによれば、デカルト以来科学主義が真としてきた「単純なものは真（PS-s.51.『論争』五十一頁）」という教義やその前提に基づく「複雑なものから単純なものへの還元（ibid.）」は、そのまま社会科学に適用することはできないと、アドルノは批判する。というのも、アドルノによれば、社会科学では、「社会定理が単純であらねばならないか、複雑であらねばならないかは、諸対象が客観的に決定する（PS-s.52.『論争』五十一頁）」からである。

また認識作業や洞察における「追行可能性⁽⁹⁾ Nachvollziehbarkeit（PS-s.54.『論争』五十三頁）」も、自然科学から借りてきた方法として、同様にアドルノによって批判される。「追行可能性」は、検証される社会的事実や理論を、検証可能な経験即ち何らかの実験によって篩にかけ、検証の網に残ったものを暫定的に承認する方法である。この方法においては、検証結果を、承認する多数の認識主観を必要とする。一方でこの方法は、「物象化された現実」において物象化された意識を有する主体の存在を、物象化された意識においても認識可能な一物象化の限界を超えない一社会理論の検証に用いるのでなければ、その威力を発揮することは難しいとされる。当然そのような場合は、検証された社会理論自体が物象化された理論となってしまう。物象化された意識を含む社会においては、やはり「追行可能性」も有力な検証方法足り得ない。（PS-s.54-55.『論争』五十三～四頁）

ポパーが論理検証する相に設定したいいくつかの自然科学的客観性の要素は、対象としての社会を過小評価したり物象化された社会の現実に目を向けないために、社会科学の領域に適用することはできないと、アドルノは批判する。アドルノにおいては、ポパーの科学主義的方法も、「社会への洞察」を禁止する「実証主義」の限界を、乗越えるものではなかった。以上のようなアドルノの批判点をふりかえてみると、追行可能なテストの検証可能性に重点をおくポパーの科学主義的姿勢も、やはりアドルノの「実証主義」批判を乗越えるものではなかった。アドルノのポパー批判並びに「実証主義」批判を確認した上で、アドルノの社会理論が目指す方向性を検討してみることとしよう。

II アドルノの弁証法

a) 社会的経験の位置付け

アドルノは、ポパーや「実証主義」の方法と対比する形で、自らの社会科学的方法といえる「弁証法」的批判理論を、展開している。この弁証法的立場は、前節で見てきたようにポパーや「実証主義」が認識主観の相に重点をおくのに対し、「総体性の経験」を著述することに力点を置く方法である。アドルノの弁証法的批判理論は、「普遍なものによる特殊なものへの支配」「現実的敵対関係」の経験を、如何にして叙述するかという点を重要視する。

「弁証法的批判は、総体性の言いなりにならないもの、総体性に反抗するもの、まだ存在しない個別化の潜在力としてのみ自らを保つものを救い、確立するよう助ける。(PS-s.19.『論争』十九ページ)」

b) 現象の社会的観相学 (gesellschaftliche Physiognomik des Erscheinenden)

アドルノがもう一つ叙述しようとしているのは、社会の現象と本質の質的飛躍 (PS-s.42.『論争』四十一頁) である。本質としての社会的総体は、二重の性格を持つ社会のうちでは、うまく認識できない。その本質にアプローチする方法が、社会現象の観相学 gesellschaftliche Physiognomik des Erscheinenden (PS-s.42.『論争』四十一頁) による総体性の解釈である。そのような観相学の具体的例を見てみる。

アドルノは、「前科学」的として「実証主義」が切り捨てる領域において、「科学のなにおいて要求されるもの (PS-s.58.『論争』五十七頁)」を解明するために「科学内で役立つ仮定」を行った例として、クラウスとフロイトの理論の例をあげる。クラウスの理論は、社会観相学として、「たいていの経験的-社会学的所見よりも、社会を解く鍵としての大きな力 (PS-s.56『論争』五十六頁)」を持つとされる。なぜならこの観相学は、「実証主義」が純粋な客観性の立場から非科学的として退ける「前もって存在するものとして経験された」社会全体の像を、個別的諸現象から描き出すからである。またフロイトの「社会的支配関係」と「自己保存」の葛藤の仮説も、「社会学の実質的進歩」

に貢献したとされる（PS-s.58.『論争』五十七頁）。

以上の例のように実際には、社会科学の領域を進展させた社会全体を解釈しようと努める方法として、「前科学的なもの」へのアプローチが関係している点が、アドルノによって指摘されている。

c) ヘーゲル弁証法から学ぶもの

アドルノの弁証法的批判理論は、ヘーゲルの弁証法を批判的に継承した方法である、と言えるであろう。アドルノは、『三つのヘーゲル研究』⁽¹⁰⁾において、ヘーゲル弁証法から何を継承した何が批判されなければならないかを、示している。そこで、アドルノの社会理論と関係する部分を、この本からいくつか抜き出してみる。

それによると、ヘーゲル弁証法において先ずアドルノが指摘するのは、『精神現象学』における「自発的精神」が実は社会的労働を表現しているという点である。アドルノは、『精神現象学』における主観—客観の弁証法が、「欲望—労働の関係」の結合によって表現されていると考える⁽¹¹⁾。自然と人間との関係は、肉体労働という契機によって相互に関係することになる。精神労働は、この相互関係を、自己保存 Selbsthaltung の原理自立化によって忘却したものとされる。ヘーゲルの主張する「概念の労働」も、アドルノにおいては、この精神労働として考えられている。精神は、自然と人間の関係即ち労働過程において生じた「肉体の苦しみ」を基礎とする反省過程であると、アドルノは指摘する。「精神の至上権は、肉体の苦しみを持って購われたもの⁽¹²⁾」とされる。しかしヘーゲルは、肉体労働を精神の一契機としてしまう。というのも常に自然と関係する肉体労働自身が、対象としての自然と、自然としての人間という二つの自然的契機を常に持つものだからである。この自然的契機を、「自然支配」を行おうとする『精神現象学』の精神は、自らの契機として取り込もうとする。この点をヘーゲルのイデオロギーの側面として、アドルノは指摘する⁽¹³⁾。というのも一方で労働としての精神が絶対精神にまでいたる過程は、労働が自然との関係で対象を規定する過程が無限拡張を行う「労働の絶対化」を表現したものであるが、この「労働の絶対化」は、精神労働が肉体労働と分離している状況にあっては「精神の肉体労働からの分離」即ち労働をめぐる特定の階級関係の絶対化に他ならないからである⁽¹⁴⁾。

しかしこのようなイデオロギー的な性格を持ちながらも、アドルノは、ヘーゲル弁証法の体系のうちに非真理とともに「くっついている」真理を指摘する。その真理とは、ヘーゲルの哲学のうちにある「哲学の基体となる社会の偽り」の体現である⁽¹⁵⁾。市民社会では、人格としての個人は、生産者として「事実上全能」でありながら、一方で社会的総生産過程の単なる「代理人」にすぎない。つまり個人の自由は社会のうちで達成され、その同じ社会が個人を支配する。ヘーゲルは、この「市民社会における特殊と普遍のアンチノミー」を明確に表現し、それによってアンチノミーの批判を準備する。この点をアドルノは、市民社会の現実における「自由の仮象」を批判するヘーゲルの理性の力として、読み取っている⁽¹⁶⁾。

以上アドルノがヘーゲル弁証法からの批判的に継承したものを確認してきたが、アドルノがヘーゲル弁証法から救い出そうとしたこととしては、「普遍なものによる特殊なものへの支配」という社会総体の客観的關係を、総体性を絶対化することなくまた主体の認識主義的還元を行うこともなく、アプローチすることを目指している点があるといえるだろう。交換関係において社会的支配関係は、人間から自立的な仮定として確かに存在しているのだが、あくまでその社会総体は主体によって行われている点を見逃してはならない。主観の「主観的還元」は批判されなければならない。アドルノは、客観でありながらも主体と関わりのある社会との緊張関係を意識し、社会の批判可能性を追求する。また一方で、主観—客観の緊張関係を読み取ろうとする点に、アドルノの弁証法の特徴があるといえよう。この点で、絶対精神の疎外過程を概念の労働によって実体化するヘーゲル『精神現象学』の弁証法とも区別される。

また「実証主義」が乗り越えられなかった「主観的還元」を批判することによって、アドルノは対象としての社会に迫ろうとする。ポパーや「実証主義」の客観性の構成の克服が、アドルノの弁証法によって目指されているといってもよいだろう。本論筆者は、社会科学における客観性の構成という点で、アドルノ弁証法に利点があると考えている。

III 「社会的経験への配慮」と社会科学

アドルノの社会理論の特徴のうち本論筆者が注目するのは、社会的経験特に個別的主体が否定される経験に対する、アドルノの力点の置き方である。これはアウシュビッツという非人間的な経験を同時代の経験が、ユダヤ人として迫害された経験が、如何にアドルノにとって一いや人類にとって一大きな影響を与えたかを、理論的に表現しようとしているのであろう。このような姿勢を「経験への配慮」として言い表すことができるであろう。ともすれば社会科学において、対象の明確さや論理的明確性に主眼が置かれ、社会的経験に対する軽視が行われる点、最近も指摘されている。認識主観に社会科学の客観性を置く立場や、社会的経験の軽視によって分析命題の明確さを主張する方法に対しては、確かにアドルノが行おうとした「経験への配慮」は、分析を行う主観自身が社会の中で特殊な歴史的経験を出発点とするのだから、大きな意味を持つことになるだろう。その点において、アドルノの指摘は注目すべきであると、本論筆者は考えている。

しかしながら、特にアドルノが「人類の危機的状況」を感じざるを得なかったナチズムの時代経験から半世紀以上も経過した現代において、社会的経験に主眼を置きすぎることに、本論筆者は抵抗を感じざるを得ない。特に社会的経験における特定の主観の経験が、ポパーが主張する意味で検証不可能な相を内包している点は、見過ごされてはならないだろう。社会的経験の理解に、何らかの理論的な翻訳が必要なことは、自明のことである。もしこの翻訳が行われぬとするならば、それは神々の黄昏として、相反する歴史的経験解釈相互の、無益な消耗戦を長期化することとなるだ

ろう⁽¹⁷⁾。現代社会においては、特に国際社会の領域において、他文化理解・衝突の問題や、過去の（主に戦争責任の）歴史的承認不承認の問題など、特定の社会的経験が特定の社会的利害を含意することが、問題の中核をなす場面が非常に多いように、感じられる。このような場面において、自己の主張する社会的経験に、過剰に重点を置くことは、ただでさえ検証困難な相を持つ「社会的経験」をより検証困難にしてしまうであろう。このことは、絶対化されるジャーナリズムの事実性に警鐘を鳴らすアドルノによって、当然批判されるだろう（PS-s.57.『論争』五十六頁）。前節で触れたように彼の弁証法は、ヘーゲルにならって、「与えられた事実の所与性や直接性の虚偽性」と本質との関係の把握にも、注意を払うとされている。もちろんアドルノが批判するポパーや「実証主義」の検証可能性の単純化は避けなければならない。しかし、社会的経験の叙述を重点に置くアドルノの立場では、経験の検証可能性つまり経験の通訳可能性について、『実証主義論争』の議論では、批判をするにとどまっている点、指摘できるであろう。

『実証主義論争』の報告においてももう一つ指摘されるのは、社会的実践の可能性をどこにアドルノが見出しているか、という点であろう。いうまでもなくポパーの「全体主義 holism」批判、知識社会学批判、方法的個人主義等は、部分的改良としての社会实践（社会的実験）としての peacemeal 社会工学の可能性を主張するために、論理づけられているといってもいいであろう。「如何なる社会状況においても主体が存する限り社会的実践は可能である」というポパーの社会的実践への配慮が、伺える。このように強調された意味での社会的実践への信頼は、アドルノにおいては、表明されていない。それは、実践というものは、人類が自然との疎外を行った過程の中で経験せざるを得なかった自然支配の歴史的産物として、批判されるべきものとして、アドルノにおいて位置付けられているからである⁽¹⁸⁾。その立場からすれば、社会的実践を一つの論理基準とするポパーの考え方は、「極端なまでの手段の自立化」⁽¹⁹⁾として批判される。その意味でアドルノは、社会的実践やその成果を前面に押し出す論理構成をとっていない。アドルノの立場では、社会的実践やその成果は、あくまで批判の対象としてある。アドルノの弁証法が、物象化の批判としては注目すべき点がある半面、主体の疎外過程を克服する理論としては、実践的展望を用意せず、理論的批判にとどまっている点指摘できるであろう。そうすると特定の社会的実践の成果の分析に比重が置かれる社会科学においては、アドルノの批判理論は、どの程度有効に活用されるのか、また主体の疎外を克服する実践の理論は、どのように展開されるのか、今後本論筆者の検討課題としたい。

以上本論は、『実証主義論争』のアドルノとポパーの『実証主義論争』における立場の違いを確認してきた。その上で、現代社会科学において課題とされる点は、社会的経験と社会的利害の媒介関係と、社会化された経験の検証可能性であろう。社会的経験の通訳は、経験を論理的に処理する以外に、どのように共有されるのであろうか。また、社会的利害を含有する社会的経験は、どのような形で社会構造と関連しているのであろうか。社会科学に関わる理論が、このような問いをどのように解決しようと努めてきたか、本論筆者の次回の課題として今後の研究を進めることとしたい。

IV 結言—社会的経験と社会認識の場の可能性

さて以上、アドルノの弁証法的社会理論—批判理論が、「社会的経験への配慮」を軸に、構想されている点、確認してきた。彼の主張をまとめるならば、以下の点にまとめることができるだろう。第一に、社会は主体としての人間と絡み合って存在しているということ。第二に、社会のそのような性格から、社会認識の批判は認識の対象への批判を含む実践的なものである必要があるということ。第三に、このような対象への批判を呼び起こす認識のアプローチとして社会認識の理論が「社会経験への配慮」を含むものでないならば、イデオロギー的な働きとして社会にペールを被せてしまう—即ち物象化 *Verdinglichung* に陥ってしまう—ということ。

このような点を踏まえるならば、「社会的経験」を認識する場が、社会認識において重要な位置を占めるということが言えるであろう。この点は、社会研究だけではなく、社会学習においても、共通した要素として位置付けることができるであろう。

ここで再び確認されなければならないのは、この「社会的経験」は、日々我々が社会的な場面で経験している、「個物を否定する」抽象的な社会的労働の経験とされる点にある。

このような社会的経験の場として想定されるのは、「社会的経験」を経験する場としての生産過程である。認識ならずとも、社会学習をしようと意図するものにおいて、生産過程は一つの基準として振舞う性格を持っている。これは、最新の金融工学と金融市場の関係、民法と物件所有者間の訴訟手続き等があげられるだろう。このような領域の社会認識及び社会学習は、理論の正当性の基準としての「社会的成功」という契機を持ち、理論自身が道具的な側面を内包している。このような成果こそ、理論が道具としての何がしかの価値を生産する場面であり、生産価値の一形態といえる⁽²⁰⁾。つまり、特定の学問領域自体が、社会の一般者である「資本の価値運動」に従わざるを得ない場面に、引き込まれていることとして説明できるであろう。以上のように社会的経験の場としての「生産過程」が、社会認識及び社会学習の場において、基準として働く点、指摘できるであろう。この点は、社会認識一般に拡張できる要素であると、本論文筆者は考える。と同時に、以上アドルノの議論をふまえるならば、「基準としての生産過程」は、資本自身の自己展開即ち主体にとっては自己疎外過程として理解されなければならない。このような点に注目しないならば社会理論自身が対象としての資本主義社会にひきこまれ、主体の自己疎外過程の批判から遠のいてしまうことになるだろう。

またこのような場において認識される「社会的経験への配慮」は、アドルノにおいて本論文で確認したように、対象としての「社会の批判」を基盤とする認識を成立させる可能性を持つ。この観点から見れば、認識する主観としての人間は、単に社会を静観的に認識するだけではなく、社会の批判によって、社会の主体となる契機を準備するといえるであろう。この場合の社会の批判は、主体が自己の行為として、資本の自己正当化の運動にかかわっていることの「自己発見」を、意味する。

社会認識や社会学習が生産過程での「社会的経験への配慮」を忘却すれば、社会認識の重要な部分である、主体の自己疎外過程の克服を準備する社会批判という契機も忘却することになってしまう。社会批判を含む認識は、社会の主体としての人間の自己確認の作業を含む認識といえる。「社会的経験への配慮」は、「主体」としての人間による社会批判を構成させるための重要な要素であり、またその社会的経験を生出す場としての「生産過程」は、社会批判を促す重要な場である。社会認識が社会批判を行うために課題として「社会的経験の配慮」に取り組むことはもちろん、社会学習の過程においても、この要素が大きな役割を果たす点が推測できる。また生産過程への配慮も同様である。

その点で、学校教育において、社会認識が主体と社会の絡み合いに重点を置くのではなく、個別の社会的事実の羅列・暗記に終始せざるを得ないのは、以上振り返ったような「社会的経験への配慮」というアプローチをとることが困難な状況に学校が置かれている点が指摘できるのではないだろうか。受験が産業化し、学習自体も分業化したような状況にあって、学習者の社会的経験は狭いものにならざるを得ない。また一方で、学校教育を離れた社会認識や社会学習の場において、社会的経験へのアプローチが大きな役割を果たしているであろう点、推測できる。今後は、社会学習の過程において、「社会的経験への配慮」や生産過程での社会的経験が果たす役割について、本論文筆者の課題としたい。

注記

- (1) “Th. W. Adorno, Karl. R. Popper, Jürgen. Herbermas, Hans. Arbert: Positivismusstreit in der deutschen Soziologie (hrsg. von Heinz Maus und Friedrich Furstenberg, Luchterhand verlag, Neuwid und Berlin, 1969 (以下 PS と略す=城塚登・浜井修・遠藤克彦訳『社会科学の論理—ドイツ社会学における実証主義論争』河出書房新社, 1979 年, 同書を以下『論争』と略し算用数字で原著の頁数を, また漢数字で邦訳書の頁数を表す)”
- (2) この用語は、ルカーチに由来する言葉である。ブルジョワ社会における「物象化された意識」である法則や体系的な知識では、その意識を成立させている社会的・歴史的・物質的基盤の世界の「総体性」を、非合理的な「物自体」としてしか理解できないことをルカーチは示そうとした（ジョルジュ・ルカーチ著、城塚・古田訳『歴史と階級意識』「物象化とプロレタリアートの意識」白水社, 1991 年, 参照）。

更にその基となったのはマルクスの用語である。本来マルクスの用語に従うならば、諸人格間の関係が諸物件の関係として現象することを意味する *Versachlichung*（大月書店版マルクス＝エンゲルス全集第 23 巻 150 頁：Marx-EngelsWerke, Dietz Verlag Berlin, 1962-64, Bd23, s.128.）と、諸物質が社会的諸事物として認識されることを意味する *Verdinglichung* とは、内容上区別される。アドルノが、これにしたがっているのかどうかは、紙面の都合上、別

の機会での筆者の課題としたい。そこで本論ではこの問題にとくに立ち入らず、邦訳書に従い、両過程の訳語として、「物象化」をあてることとする。なをマルクスにおける両過程の分析は、山本広太郎著『差異とマルクス』青木書店、1985年、第4章及び第5章参照。

- (3) Max. Horkheimer und Th. W. Adorno: Dialektik der Aufklärung, 1944, Adorno Gesammelte Schriften Band3, Vorrede, s.15. (徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店、1990年、xiv頁)
- (4) たとえば同書の以下の個所参照。

「思考を数学的装置へ還元することの内には、その装置に固有の尺度として世界を認可することが含まれている。主観的合理性の勝利として現れるもの、つまりあらゆる存在者を論理的形式主義の下へ従属させることは、直接に目の前にあるものへの、理性の従順な服従によって購われる」 a. a. O. s.43. (邦訳書三三～四頁)

「論理学から思考を追放することは、工場や事務所における人間の物象化 (Versachlichung) を、講堂において承認することを意味する」 a. a. O. s.47. (邦訳書三九頁)

- (5) この点において、ヴィットゲンシュタインと、ポパーとは区別される。なぜなら、ポパーは、理論検証に、「追行可能性＝経験 (実験) による検証」を主張しているからである。しかしながら、このようなポパーの立場も、アドルノによって批判される。なぜなら、後の個所で触れるように、ポパーの理論においては、方法的個人主義が採用されているため、矛盾を内包する社会の総体性 (Totalität) を認識しようとしないう点で、やはり主観主義的だからである。本論 1.2-2 参照。

- (6) ポパーは、自らの哲学的立場を、ウィットゲンシュタインや論理実証主義者たちから、明確に区別している。また彼の実験を論理の判断基準に据える追行可能性の立場などは、ヴィットゲンシュタインなどとは一線を画する立場であると、本論著者も考えている。しかしながらアドルノは、ポパーのうちにもある、実証主義的な側面を燻りだし、批判している。このようなアドルノの視点から、ポパーも「実証主義者」として、分類される。

- (7) Th. W. Adorno: Negativ Dialektik, 1970, Adorno Gesammelte Schriften Band6, s.178. (徳永・渡辺・木田ほか訳『否定弁証法』, 作品社, 1996年, 二百十六頁) ”

- (8) ポパー「社会科学の論理」(PS-s.103-123.『論争』百九～二十八頁)。

- (9) ポパーの『実証主義論争』における報告に、「追行可能性」を明記した個所は見られない。しかしポパーの他の著作において、ほぼ同内容を表わす用語「テスト可能性 testability」を見つけることができる。内容としては、科学的事実の暫定的確証性を与える要素として、追体験即ち実験による検証可能性をさす。

“The Open Society and Its Enemies, Princeton University Press, first publication in U.S.A, 1950 以下 Ops と略す (小河原誠・内田詔夫訳『開かれた社会とその敵 (全二部)』未来社, 1980年, 以下同書を『開かれた社会』と略しローマ数字で各部を、算用数字で原著の頁数を、

また漢数字で邦訳書の頁数を表す)”

Ops II -p.222. 『開かれた社会』 第二部二百五頁参照)。

- (10) “Th. W. Adorno: Drei Studien zu Hegel, 1970, Adorno Gesammelte Schriften Band.5 (渡辺祐邦訳, 『三つのヘーゲル研究』, 河出書房新社, 1986年)”
- (11) a. a. O. s.268-270. 邦訳書三十九～四十頁。
- (12) a. a. O. s.271-2. 邦訳書四十三頁。
- (13) ibid.
- (14) a. a. O. s.272-3. 邦訳書四十四～五頁。
- (15) a. a. O. s.277. 邦訳書五十二～三頁。
- (16) a. a. O. s.290. 邦訳書七十一頁。
- (17) ここで筆者が念頭においているのは、つい先年、藤岡信勝東大教育学部教授などによって行われ、「従軍慰安婦の存在の可否」をめぐる発言からはじまった、一連の「大東亜戦争」肯定の議論である。藤岡氏は、「利己心を捨てて奉公にあたった」経験の救い出しに、躍起になられているように、筆者には思われる。藤岡氏が主張する立場は、彼が反対する「従軍慰安婦」の証言同様、検証の困難な事実性を含んでいる。語られる経験が正しいのかどうか、という経験の検証可能性は、歴史的事実性を問題にするときには常に意識されなければならないであろう。というのは現代において、我々が思っている以上に、「経験」の社会的影響力が増大しているからである。
- (18) “Th. W. Adorno: Negativ Dialektik, 1970, Adorno Gesammelte Schriften Band6, s.314. (徳永・渡辺・木田ほか訳 『否定弁証法』, 作品社, 1996年, 三百八十八頁)”
- (19) “Th. W. Adorno: Stichworte, 1977, Adorno Gesammelte Schriften Band10-2, s.770-1. (大久保健治訳 『批判的モデル集II見出し語』, 法政大学出版局, 1971年, 二百四十二～一頁)”
- (20) ハーバーマースは、現代資本主義社会をオッフェにならって「晚期資本主義社会」と定義し、マルクスの剰余価値理論を批判的に継承し、「晚期資本主義社会」では、生産過程における労働者からの搾取によって生まれる価値である「絶対的剰余価値」重視の社会ではなく、発明や特許により企業間競争を行うことで生まれる価値である「相対的剰余価値」重視の生産活動が行われる点を指摘している。このことによって、「晚期資本主義社会」では、特定学問分野の競争における急激な発展と、教育がこのような学問に対応して専門化・競争化する点指摘している。
ユルゲン・ハーバーマース著, 細谷貞雄訳, 『晚期資本主義における正当化の諸問題』岩波書店, 1979年, 三十五, 五十七～八, 八十八～九十一頁参照。

参考文献

アドルノ

^Th. W. Adorno: Drei Studien zu Hegel, 1970, Adorno Gesammelte Schriften. Suhkamp verlag. Band.5 (渡辺祐邦訳、『三つのヘーゲル研究』, 河出書房新社, 1986年)〃

^Th. W. Adorno: Negativ Dialektik, 1970, Adorno Gesammelte Schriften Suhkamp verlag. Band.6 (徳永・渡辺・木田ほか訳『否定弁証法』, 作品社, 1996年)〃

^Th. W. Adorno: Stichworte, 1977, Adorno Gesammelte Schriften Band10-2 (大久保健治訳『批判的モデル集II見出し語』, 法政大学出版局, 1971年)〃

^Max. Horkheimer und Th. W. Adorno: Dialektik der Aufklärung, 1944, Adorno Gesammelte Schriften Suhkamp verlag. Band3 (徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店, 1990年)〃

ヴィッガーハウス著, 原・鹿島訳『アドルノ入門』, 平凡社, 1998年

M・ジェイ著, 木田・村岡訳『アドルノ』, 岩波書店, 1987年

細見和之著『現代思想の冒険者たち 15 アドルノ』, 講談社, 1996年

ハーバーマス

ユルゲン・ハーバーマス著, 細谷貞雄訳, 『晩期資本主義における正当化の諸問題』岩波書店, 1979年
ヘーゲル

^G. W. Hegel: Wissenschaft der Logik1-2, 1986 (1832-45), G. W. Hegel Werke. Band5-6 Schriften Suhkamp verlag. (武市隼人訳『大論理学』, ヘーゲル全集六〜八, 岩波書店, 1956年)〃

^G. W. Hegel: Phänomenologie des Geistes 1986 (1832-45), G. W. Hegel Werke. Band3 Schriften Suhkamp verlag. (金子武蔵訳『精神現象学』, ヘーゲル全集四〜五, 岩波書店, 1971年)〃

マルクス

^Marx-EngelsWerke, Dietz Verlag Berlin, 1962-64, Bd23 (大月書店版マルクス=エンゲルス全集第23巻)〃

カール・マルクス著, 城塚・田中訳『経済学・哲学草稿』, 岩波文庫, 1964

ポパー

^Karl. R. Popper: The Open Society and Its Enemies. Princeton University Press, first publication in U.S.A, 1950 (小河原誠・内田詔夫訳『開かれた社会とその敵(全二部)』, 未来社, 1980年)〃

^Karl. R. Popper: THE POVERTY OF HISTORICISM, first published in 1957 by ROUTLEDGE & KEGAN PAUL, London (久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困—社会科学の方法と実践—』, 中央公論社, 1961年)〃

^Karl. R. Popper: Conjectures and Refutations. Printed in England by Clays Ltd, Ives plc (藤本・石垣・森訳『推論と反駁』法政大学出版局, 1980年)〃

カール・R・ポパー著, 小河原・蔭山訳『よりよき世界を求めて』, 未来社, 1995年。

カール・R・ポパー著, ポパー研究会訳『フレームワークの神話』, 未来社, 1998年。